

第三章 丸屋商社の創立

一 有的横浜に赴く

慶応三年（一八六七年）早矢仕有的は福沢諭吉の門に入って、その薬研堀の医院を閉じて、本所番場に移った。従来の患家はこれを両国同朋町の桑田衡平に譲った。桑田衡平は有的の英学修業の同窓であった。その翌年（明治元年）には戊辰の戦乱が起ったが、四月には江戸は開城し、秋には奥羽の戦争も一段落を告げて、政局は一応安定した。有的はこの新しい情勢に際会して、かねてからの志業を實行しようと志し、新政府から大学小助教の資格を得て、その時横浜姿見町に設けられた黴毒病院の院長に任命されて、八月単身で横浜に赴いた。大塚熊吉の記憶によると、この時米一斗五升と金一兩二分を携えたという。横浜はこの時開港以来すでに十年を^経過し、吉田橋の北東に当るいわゆる関内の地域には、海岸に近く本町、弁天通、太田町などの町並が整って、生糸、茶、漆器などを商なう店舗が軒を接し、また山下町、山手本町は居留地として、アメリカ、イギリスなどの商館が次第に設けられ、かつての蕭条たる漁村は、急激に繁榮する開港場に変貌しつつあった。同時に新文化の輸入も、またここを門戸として、元治元年には、岸田吟香、浜田彦藏（ジョセフ・ヒコ）等は、「新聞誌」を発行して、海外の情報を伝え、慶応二年には運上所内英学所（明治二年に修文館となる）が設けられて、学問の中心となった。いわば横浜は有

的がその事業を創めるためには、それ以前の長崎にも優って、うってつけの土地であった。

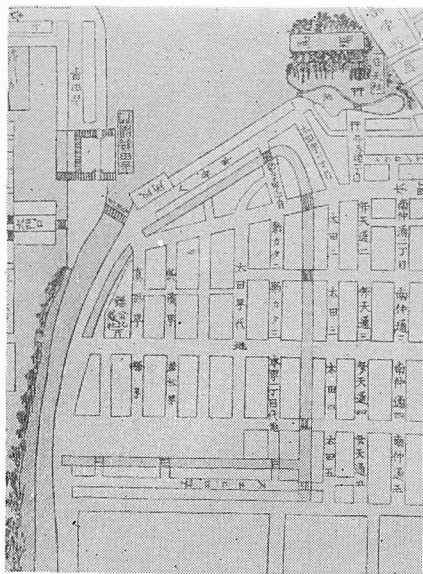
有的は横浜で、はじめ木村撰津守の親戚の経営する真砂町の質屋の一室を借りて、そこから病院に通勤した。宮嶋義信は当時有的の部下の医員であった。間もなく松山棟庵等も同宿することとなったので、場所がすこぶる手狭となり、新浜町に間口九尺ほどの小さい一戸を借り受けた。新浜町は明治六年の市区改正によって尾上町に合併されて、その町名はなくなったが、大体現在の尾上町三・四丁目に当る。深沢菱潭の書いた「横浜往来」に

「氣も相生に高砂や、尾なみもしく住吉と、常盤の松の尾上町」

とあるのがこれである。有的の居宅は相生町の西側に当る場所であったというが、いまは正確にはわからない。こ

の地がすなわち丸善の発祥の場所となったのである。

この丸善の最初の店舗について、一つのエピソードがある。星野直樹（元企画院総裁）の談話によると、星野の祖父宗七は生糸問屋で、数軒の貸家を持つていて、有的はその一つを借りたものである。宗七は職業柄繭の買いつけのために各地を廻って、自宅は留守勝ちであった。その不在中に借家の人々が、家賃の値下げを要求して、星野家に談じ込んだ。宗七の妻はいは、已むを得ずその要求に応じたが、そ



発祥の地附近の図（慶応四年横浜明細全図より最近横浜區画略図）

の中に加わらない人々も、もとのままにするわけには行かないので、一律に値下げをした。丸善の店舗もその中にあった。ところが有的はこれを肯ぜず、早速星野家を訪うて、

「自分は主人の不在中に、女を相手にして、家賃の値下げの要求をするなどは、絶対に反対で、仲間には加わらなかった。どうか以前の通りの家賃を取って貰いたい」

と申し出た。るいはその公明な態度に、心から感激したという。この問題がどう落着いたかは不明であるが、また有的の性格を物語る一つの佳話といわなければならない。

有的は病院へ通勤するかたわら自宅でも診察を行なってすこぶる繁昌したという。また時々当時三十九番館に住んでいたヘボンのもとに赴いて、その助手を勤めたこともあったという。有的は移り住んで数か月ならずして、横浜でその生活の基礎を定めたのである。

二 丸屋書店の開業

生活の基礎の定まった有的は、いよいよその志業の実現に志ざすこととなった。

有的はまず開業の資金として、桑田衡平から、二十兩を借り入れた。恐らく現在の二十万円ほどに当ると思われる。勿論有的自身の資金もこれに加えたことであろう。有的はこれと共に福沢の紹介によって、芝神明前三島町にあった書肆岡田屋嘉七のもとに赴き、福沢の著書などの委託販売を請うた。岡田屋はすなわち「西洋事情」の発売元である。また柳河春三の経営する日本橋本町四丁目の中外堂、及び横山町三丁目の和泉屋金右衛門からも書籍の

委託販売を引き受けた。柳河春三は幕末の洋学者で、開成所教授として著書訳述が多く、有的はすでに名古屋で知り合いであった。また和泉屋は有的の患家先であった。

有的は、同志の大塚熊吉に命じて、東京の柳町の湯屋で古材木を買い入れ、これを舟積みにして横浜に送り、店の造作や陳列棚を作り、これに有的所蔵の書籍並に東京で買い集めた若干の書籍を陳列して、新浜町にはじめて書店を開業した。これからすると最初は洋書も勿論若干はあったであろうが、和書・漢籍などが多かったように思われる。その時日は明治元年十一月十日であったという。しかし正式には明治二年一月一日とされている。すなわち昭和四十三年を去ること、正に百年の昔である。

三 丸善の名称

この新しく開業した書店は、丸屋と名づけられた。丸屋という店名は、江戸時代にあって、それほど珍らしいものではない。丸という言葉に金銭という意味があり、丸持が富豪を意味するようなことからであろう。江戸草創の頃から寛文の頃まで、大伝馬町に丸屋という大商人があつて、京坂地方まで手広く商売し、その頃の俗謡にも

沖に見ゆるは丸屋が船か、丸にやの字の帆が見ゆる
と歌われたことがあるという。

しかしこの新書店が、丸屋と名づけられたのについては、特別な理由がある。有的の長男早矢仕四郎の追憶談によると、開店に当って、有的は多くの商店のように、出身国名、業種名などを用いることを避け、福沢諭吉などと

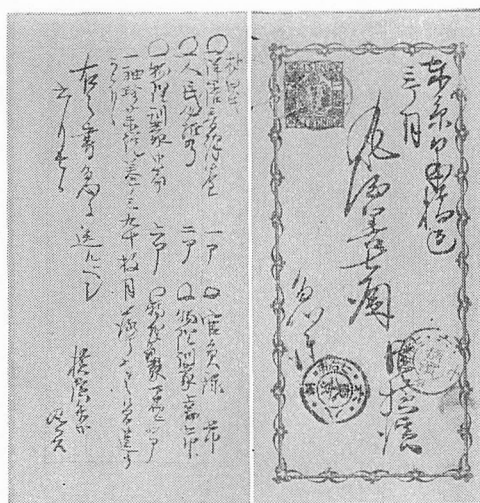
も相談して、世界を相手にして商売するという意味から、地球の球の字を取って、球屋と名づけ、これをマルヤと呼んだ。ところが人々はこれを読み誤ってマリヤといい、中にはタマヤなどという者もあるので、読み誤りのないように、丸屋の文字を宛てたものであるという。あるいははじめには、球屋たまやと名づけたのを、世間ではこれをマリヤと呼ぶ者が多いので、丸屋と改めたという説もあるが、前説の方が穩当である。いづれにしても最初は球屋であったものが、少し後にこれを丸屋と改めたことは、事実であろう。

しかし丸屋の開店は公称明治二年一月一日であって、同日付で「丸屋商社之記」が公けにされている。事実上の開店が、前述の通り、前年の十一月であったとしても、その間は極めてわずかである。丸屋と称した事情については、なお若干疑問を挿む余地がないでもない。また丸屋と丸家とは、そのはじめから、甚だルースに混用されてこれを厳密に区別することは困難である。

丸屋の店主名は、善八という。善八という名は、有的が郷里を出発する際に援助を与えた中洞村の庄屋高折善六の名に因んだものであるという。しかし勿論実在しない、いわば単なる名義人としてだけの名前であった。当時は諸届類には、名義人の生年月日を記入することが必要であったが、それには番頭の三次半七の長男半之助のもの（慶応四年六月十四日）を用いたという。實際は有的は、この名義人を架空のものとするつもりはなかったようである。自分の子の四郎あるいは三次半之助を善八とするつもりであったらしい。ところが明治五年に戸籍法が施行された時に、このことが忘れられて四郎も半之助も、そのまま届け出でられた。そのために善八の名は、全く架空の名義だけとなった。後にこの名義の処置に困って、失踪届を出してその消滅を図ったという笑話がある。

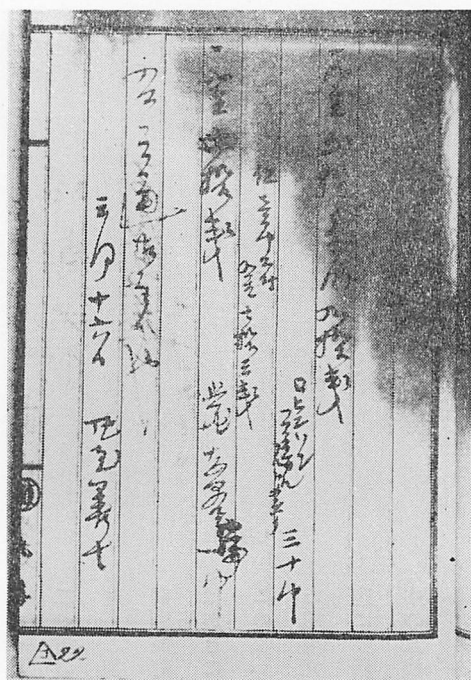
しかし商店の屋号の下に、営業者の名を連ねて、これを通称とすることは、江戸時代から極めて普通な習慣であった。丸屋善八の名は、やがてこれを省略した丸善という名で呼ばれるようになった。ちょうど八百屋善四郎が略されて、八百善と呼ばれ、橋本善吉が略されて橋善と呼ばれるようになったのと同様である。これは恐らく他称から自称に移ったものであろう。

この丸善の称呼が用いられるようになったのは、随分早いことであろうが、その性質上その時期は明確にはわからない。しかし明治六年十月刊の「丸屋商社之記」の柱（版心）には、すでに丸善と刷られている。また明治七年



明治七年のはがき

六月七日と記された横浜本店から東京支店宛て送られた二つ折の郵便はがきには、末尾に横浜弁（天町）式（丁目）丸善と書いてある。また同年十一月二十八日の消印のある東京尾張町三丁目の丸屋指物店氣付服部源助宛の関根録三郎のはがきには、その肩書に「横」浜二丸善方と記されている。この頃から丸屋が丸善と呼ばれていたことが確実である。また明治九年の三月から十一月に互って、横浜本店から東京支店に書籍を注文したはがきが十余枚保存されているが、その中の五枚は丸善と書かれている。また同年十月二十九日の消印のある江馬春熙宛のはがきにも、東京日本橋通三、丸善と



丸善の見積書（岩崎弥太郎伝記編纂会蔵）

明記してある。丸善の名が、この頃すでに通称であったことがわかる。

やや年代が遅れるが、明治十一年三月に三菱商業学校に差出した書籍の価格見積書の罫紙の柱には、⑩丸善と印刷してある。（その名義人には丸屋善七とある）これはこの時代にはすでに丸善の名称が定着したことを示すものである。

明治十三年に丸屋商社は改組して有限責任株式会社となり、その際に名称は丸善商社と

なった。丸善の名はここに公式に確定したわけである。

しかしその後になっても、丸屋の名が直ちに消滅したわけではない。改組直後の明治十三年七月に発行された「一語通信」は、英語の初歩の語彙を集めた小本であるが、その末尾に「横浜弁天通二丁目、丸善商社」とあるにも拘わらず、三府発行書肆の中には、「日本橋通三丁目、丸屋善七」横浜書肆の中には「弁天通二丁目、丸家善八」として名を挙げてある。尤もこれはまだしも過渡期のせいであると考えられよう。明治十八年五月に発行された「東京商工博覧絵」第二編には、日本橋の丸善商社はじめ、銀座の裁縫店、本町の薬種店、尾張町の指物店の図が

載せてある。その四軒とも屋根に掲げられた看板は、いずれもローマ字で、Z. P. MARUYA & Co.と綴っている。田中二郎の回顧談の中に、顔見知りの肴屋から

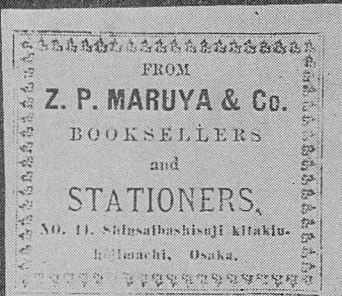
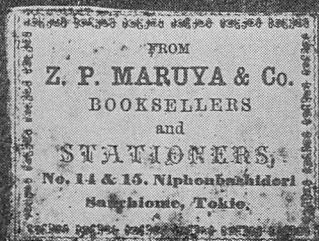
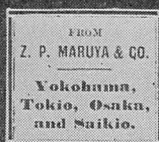
「お店^{たな}の看板は英字で書いてありますね」

と云われたとあるのがこれである。Z. P. は善八のイニシアルである。

また一八九六年（明治二十九年）頃にニューヨークのマンロー書店から発行されたシーサイド・ライブラリ（Sea-Side Library）は、主として推理小説などの軽文学を収めた叢書で、日本に広く流布したものであるが、（黒岩涙香の多くの翻訳などは、これを底本としたという）その中に表紙に Z. P. MARUYA と刷り込んだものがある。丸善が特に売捌元であったからであろうが、これによっても、その頃までマルヤの称号が、なお堂々と通用していたことがわかる。

実をいえば丸屋の名は、部分的には現在でもなお残っている。外国の出版会社あるいは運送会社から丸善に送られてくる書籍の荷造用の箱には、菱形の中に Z. P. M. の略符号を記したものが多々。Z. P. MARUYA としたものも若干はある。そして丸善自身その電信の略符号は、トウキョウ・マルヤである。創業以来の古い伝統は、百年の歳月を経ても、容易に失われないものである。

これに因んで書き添えて置きたいのは、書籍の表紙裏のトップに貼付されているラベル（書店票）についてである。このラベルは、その書籍を販売した書店名を表示しているために、蔵書家に取っては一種の記念品であり、また蒐集家に取っても蔵書票ほどの趣味はないが、若干の注意を惹くに足るものである。丸善ではヨーロッパの習慣



を模倣して、このラベルを早くから使用し、またそのデザインも、前後によって若干の変化がある。現在八木佐吉の聚集の中には、FROM Z. P. MARUYA & Co. としたものが、四種ある。これらはいずれも明治十三年以前と見做すべきものであろう。そしてその意匠と朱色の印刷は、ロンドンのボーン製本所 (W. Bone & Son) のラベルを、そのまま模倣したと思われる。ところが、同じ意匠でオリブ色のものは、大阪支店のものであるが、北久宝寺町丸善とあり、また縦長黒色のものには、丸善書店製本部とある。一見奇異な感じを与えるが、これは丸屋と丸善とが、当時混用されていたことを示すものであろう。このラベルの中で、最も古いと思われるのは、岩倉規夫氏所蔵のナポレオン法典 (Code Napoleon.....1876) の扉に貼付された白地に黒色で、Z. P. MARUYA & Co. No. 11 & 15 Nipponbashi-dori, Sanchiome, Tokio 東京日本橋通三丁目丸屋善七と印刷したもの (サイズ、縦四・五センチ、横五・二センチ) と、八木所蔵の F. Wayland-The Elements of Intellectual Philosophy. New York, 1865 の見返しに貼付された、白地に黒く FROM Z. P. MARUYA & Co.—Yokohama, Tokio, Osaka, and Saikio と印刷したもの (サイズ縦二・一五センチ、横二・四センチ) である。いずれも珍品であるが、前者は明治九年の翻刻本で、その年代が明白であり、後者は横浜を (本店として) トップに挙げ、京都を西京と表記しているところから、恐らくやや前者よりも先んずるものと思われる。

衣笠梅二郎氏の「丸屋・丸善・書店票」(学鐙昭和十一年第四十巻十号)によると、同氏所蔵の一八七五年 (明治八年) 刊行の日英語の研究書 (書名不明) に貼付されたラベルには、白地に黒色で、FROM Z. P. MARUZEN & Co. Yokohama, Tokio, Osaka, and Saikio (サイズ二・一五センチ×二・三センチ) とあるという。編者はい

まこのラベルを実見しないために確言できないが、Z. P. MARUZEN とは不通の名称であるから、これは恐らく衣笠氏の誤りで、前者と同一のものであろう。

八木の蒐集品は、このほかに、なお大阪・福岡等の支店のものを含めて十数種ある。この由緒あるラベルがほぼ大正十二年の震災以後、昭和のはじめ頃から、書籍の販売量の増加に伴って、廃止されたのは已むを得ないことながら惜しいことである。

四 「丸屋商社之記」

丸屋の創業とともに、その趣旨と抱負を明らかにしたものが、有名な「丸屋商社之記」である。やや長文ではあるが、丸善の事業の根本方針を述べた、極めて重要な文献であるから、左にこれを掲げる。

凡ソ事ヲ為スニハ先ヅ自カラ其身分ノ地位ヲ考ヘザル可ラズ今我輩ノ地位ヲ考フルニ官ニ在テ政ヲ為スノ責アルニ非ズ亦奴隸ト為テ他人ニ仕ルノ務アルニ非ズ不羈自由我欲スル所ヲ為ス可キ日本人ナリ既ニ日本人ノ名アレバ亦其日本人タル身分ヲ考ヘ日本全国ノ繁盛ヲ謀リ同国人ノ幸福ヲ助ケ成サバム可ラズ

冒頭にまず独立の日本人の自覚を以て、日本国家の繁栄と、国民の幸福とのために寄与すべきことを説く。

昔鎖国ノ世ニ在テハ人皆自国ノ有様ニ満足シテ更ニ歩ヲ進ルノ志アル者ナク却テ自負驕慢ノ弊ニ陥リ或ハ此国ヲ武ノ国ト称シ或ハ義ノ国ト唱ヘ或ハ万国至尊ノ神州ト云フ者アリ或ハ百需全備ノ富国ト云フ者アリテ自国ヲ

尊崇スルコト其実ニ過ギ徒ニ虚名ヲ設テ独リ自カラ悦ビシコトナレドモ今日外交ノ盛ナルニ当テハ其虚名ヲ棄テ、実ヲ求メザル可ラズ竊ニ此国勢ヲ察スルニ近来我海陸ノ軍制一面目ヲ改メタリト雖ドモ未ダ彼ノ国ノ盛ナルニ及バザルハ明ニ人ノ知ル所ナレバ独リ我国ノミヲ以テ武国ト称ス可ラズ世界万国義理ヲ棄テ、国ヲ建ルモノアルヲ聞ズ西洋諸国既ニ建国ノ名実アレバ悉皆不義ノ国ニ非ザルコト明白ナリ然バ則チ独リ我国ノミヲ以テ義国ト云フノ理ナシ西洋諸国各独立ノ一政府ニテ比肩併立互ニ其国威ヲ持張スルモノナレバ独リ我国ノミヲ以テ至尊ノ神州ト唱フ可ラズ天然ノ物人工ノ品万国各其類ヲ同フセザレバ独リ我国ノミヲ以テ全備ノ富国ト云フ可ラザルナリ虚心平氣以テ世界ノ景況ヲ問ヒ其文明ノ前後ヲ察スレバ我日本国ハ数千百年鎖国ノ睡眠中ニ西洋ノ諸国ヲシテ恰モ先鞭ヲ著ケシメタルモノニテ我国コソ却テ彼国ノ有様ニ及バザル可シ是即チ我輩ノ常ニ患ル所ニテ其所患ノ原因ハ先人数百年ノ安眠中ニ醸シ成シタル遺伝ノ国毒ナリ

従来日本のみが神州と称して、自国を尊崇することその度に過ぎて、却って自負驕慢の弊に陥ることを戒め、日本が鎖国の間に、その文明の点において欧米に後れを取ったことを指摘する。当年の進歩的な文明論者の面目躍如たるものがある。

今コノ毒ヲ一掃シテ彼ノ文明ノ域ニ入り共ニ進歩ヲ争ハントスルニハ其事固ヨリ多ク其業固ヨリ難シ文学研カザル可ラズ武備修メザル可ラズ百工技芸一モ等閑ニス可キモノナシト雖ドモ就中至重至大コレヲ等閑ニシテ禍ヲ致スノ速ナルモノハ商売ノ一事ナリ

抑モ外国人ノ我国ニ来ルハ唯和親ノタメニ非ズ其実ハ貿易ヲ行ハンガタメナリ現今外人ノ我国人ニ接スル趣ヲ

見ルニ文学ヲ伝ル者アリ技術工業ヲ教ル者アリ法ヲ講スル者アリ武ヲ演ズル者アリト雖ドモ是等ハ皆外国交際ノ技末ニテ彼ノ大眼目ハ唯貿易ニ由テ利益ヲ求ルノ一事ニ在ルコト固ヨリ論ヲ俟タズ然ルニ今コノ貿易商売ノ權ヲ外人ニ占ラレ坐シテコレヲ傍觀スルハ日本人タル我輩ノ義務ニ背クト云フ可シ一度ビ貿易ノ權ヲ失ヒ彼ニ致サレ彼ニ依頼シ彼ノ元金ヲ借り彼ノ社中ニ役セラレ或ハ我社中ニ彼ノ国人ヲ招キコレヲ尊ビコレヲ仰ギ其指令ノ下ニ奔走スル等ノ勢ニ陥ルコトアラバ國ノ災害コレヨリ大ナルハナシ斯ノ如キハ則チ國其國ニ非ズト云フモ可ナリ國其國ニ非ザレバ文学技術モ用ヲ為スニ処ナカル可シ是即チ我輩ノ所見ニテ商売ヲ至重至大ノ急務ト為シ彼ノ文学技芸ハ先ヅ他ノ學者ニ任ジ政治ノ事務ハ在官ノ人物ニ譲リテ我身ハ専ラ商売ニ従事シ日本國ノ商法ヲシテ獨立ノ地位ヲ得セシメ同國ノ人ヲシテ其幸福ヲ失ハシメズ以テ我輩ノ身分ニ恥ルコトナカランヲ企望スル所以ナリ

しかも歐米人の渡來の目的が、主として貿易の利を得るにあることを論じ、この貿易の事業が外人の独占に委ねられては、國家の獨立も、これを維持しがたいために、政治・學術の輸入のことはこれを他に譲って自ら奮つて商業に身を投じて、外人とその衡を争そう決心を告白する。ここにはまた慷慨已み難い國權論者の立場が明らかに示されている。

何等ノ職業ヲ問ハズ執行煉熟ナクシテ成シ得ベキモノアラズ然ルニ今吾輩社ヲ結ビテ商売ヲ營マントスルニ當リ嘗テ學ビシコトモナク又馴レタル事モナシ之ヲ學バンニモ世間商売學校ノ設アルヲ聞カズ又帳合ノ仕方ヲ教ル人サヘモナキヲ如何セン依テ謂ラク吾社中ノ人僅ニ英書ノ表題ヲ解スルモノアリ又藥品ノ名稱ヲ知ルモノア

レバ此類ノ品ヲ以テ業トナシ吾会社ヲ以テ商売学校ト見做シ吾徒實際執行ノ道場トシテ歲月務メテ止マズンバ漸ヲ追テ商売ノ道ヲモ學ビ得ルノ時アラント是即商売ニ附テハ無學文盲ナル吾輩ノ斷然意ヲ決シテ事ニコニ從フ所以ニシテ敢テ一時ノ盛業ヲ企望スルニハ非ザルナリ

凡ソ人ノ生業ハ世間ノ不足不自由ヲ達シ吾不足不自由ヲ満足セントスルノ外ナラズ他ノ不自由ヲ達スルノ大ナルモノハ吾幸福ヲ得ルモ亦從テ大ナリサレバイカナル生業ヲナサバ吾徒ノ力能ク他ノ使用ヲナシ得ベキヤヲ議セザルベカラズ顧フニ近來世間開化ノ端ヲ啓キ諸芸術モ亦進歩ヲハジメ人間幸福ヲ増スノ時ニ向ヘリサレドモ未ダ何事モ備ワラザルモノ多ク特ニ人世ノ急務タル教育ノ職濟生ノ業ノ如キモ或ハ洋籍ニ乏シク或ハ藥品医
用器械ニ乏シク不自由少ナカラズト云ベシ故ニ吾社先此品類ヲ売買スルヲ以テ專業トナサントス

商業に志すといつても、全くの素人に取つては、もとより容易のことではない。そこでそれまで些か習熟した英學と醫學とを利用して、西洋の書籍、藥品、醫療器械の輸入を專業とし、當時の需要に応じようという。その決意は実に壮なりというべきである。

人間ノ業務ハ盛衰常ナシト雖ドモ其盛衰ヲナスノ原ハ事物ニ処スルコト正理ニ依ルト之ニ悖ルトノ際ニアルベシ故ニ一人人事ヲ独裁スルトキハ或ハ誤テ正當ヲ失スルモ他ヨリ之ヲ批判裁正シ難シ是レ危害ノ由テ生ズル所ナリ同志社ヲ結び相互ニ輔ケ相互ニ正シ以テ正理ニ悖ラザルヲ求メバ自ラ転覆ノ患ヲ防グニ足ルベシ今同志數輩ト諮リ或ハ元金ヲ出シ或ハ其身ヲ容レテ一商店ヲ開キ丸屋商社ト名ク其元金ヲ出ス人ヲ元金社中ト名ケ其身ヲ容ル、人ヲ働社中ト名ク

働社中ノ心得

吾働社中ハ商売ニ煉熟スル人モナク用ユル所ノ元金モ甚ダ多キニ非ザレバ世上有力ノ人ト例ヲ同フセバ転覆從テ来ルコト必セリ故ニ勉メテ儉節ヲ守リ正実ニ業ヲ営ミ信以テ天ノ輔ヲ招キ儉以テ經濟ヲ護リ偏ニ会社ノ長久堅実ヲ企望シ各人互ニ相扶ケテ後來ノ幸福ヲ希フベシ

合衆國貨幣ノ銘ニ曰ク合スレバ即チ立チ散レバ即チ斃ルトユナイテッドステイト又西洋ノ古語ニ曰ク徐々ニ急グ可シトスローリーハスト何レモ商業ニ就テノ戒メニハ非レドモ吾働社中ノ人此語ヲ以テ意トセバ転覆ノ懼レナキニ近カラン又或ル老人ノ咄シニ世間ノ商家一廻ノ商ヒニ万金ヲ得ルモノハ屢々アレドモ十年ニシテ数万金ヲ残ス人ハ稀ナリト商人ノ目ヲツクベキ所ナルベシ

困難な貿易事業を遂行するために、同志相結んで働社を結成し、信用を重んじ、堅実の方針を以て事に当るべきことを説く。丸善の營業は実に創業以來この主旨を守って一貫しているのである。

ここに働社というのは、いわば共同經營を意味するのであって、実に会社組織の濫觴といふべきものである。早矢仕四郎の追憶談によると、有的は福沢諭吉からウェーランドの經濟学を學んで、その中で joint stock company の説明を聞いて、大いに得るところがあり、日本の商家のような個人世襲の經營では、その營業に不適当な子孫があった場合には、産を破り店を亡ぼすことになり易いが、会社組織であれば、適材適所で事業を進めて、企業の永續を望むことができると考え、新に開業する丸屋に、会社組織を採用することに決心したのであるという。すなわち丸屋は、わが国で会社組織を採用した企業の、最も早いものの一つであることは疑いがない。ただ開業当初の出

資者である元金社中が何人であったか、またその出資金がどれほどであったかといふことは、遺憾ながら知ることができない。

損失アル時ノ心得

大概商業ニ危害ヲ帶ザルモノナシ故ニ永年ノ間ニハ災害モ過失モアルモノト思フベク常ニ其心得ナクテハナラヌモノナリ若シ不幸ニシテ災害ニ逢フモ又商売上ニ損失アリトモ急ニ之ヲ復セント思フコト勿レ又徒ラニ之ヲ悔ユベカラズ其損ヲナシタル所以ノ原由ヲ顧ミ以テ後來ノ戒メトセバ却テ安全ノ基トモナリ何時トナク回復ノ出来ルモノナリ左スレバ数年ニ一回宛ノ損アリトモ転覆ニハ至ラザルナリ若シ大ニ其損ヲ悔ヒ偏ニ之ヲ復セント謀ルトキハ多クハ又初二損ヲ為シタルト同ジ原由ニテ齊シク損毛ヲ重ヌルモノナリ余世間大商ノ転覆ヲ見ルニ多クハ初ノ損ハ少ナクシテ身代ヲ傾クル程ニハアラザルモ急ニ其損ヲ復センコトヲ企テ二度目三度目ノ損ニテ破滅スルモノナリ故ニ商人ハ一旦ノ利ニ誇ルコトナク一旦ノ損ニ驚クコトナカレ唯恐レ慎ムベキハ日々々々輕々ノ損ナリ只希ヒ望ムベキハ連綿不斷輕々ノ利ナリ一旦ノ損ハ連綿輕々ノ利ヲ以テ救フベケレドモ連綿輕々ノ損ハ一時ノ利ヲ以テ補ヒ難シ

損失があつても、その原因をたずねて、後來の戒めとすれば、却つて安全の基となること、一旦の損失に驚かず不斷輕々の利益を望むべきことを説く。

意外ニ利益アリシ時ノ心得

凡ソ人ハ戒慎ヨリ幸福ヲ得油断ヨリ災害ヲ生ズルモノナレバ善キモ惡シキモ常ニ異ルコトアレバ倍々マス謹慎ヲ加

エテ注意スベキナリタトヘバ若シ今吾商売品輸入ノ欠乏スル歟或ハ入用ノ俄ニ増スコトアリテ利益常度ヲ超ユルコトアルトキハ必ズ又從テ輸入度ヲ超ヘ同商売齊シク利益ヲ得難キニ至ル此時ニ当リ預メ其覚悟ナキ人ハ産ヲ破ルコトアリ

明治二己巳年正月

これに反して、不時に利益を得た際には、ますます謹慎して、營業に注意すべきことをいう。以上は本文であるが、明治六年に、末尾に左の一章を追加している。

此冊子ヲ上木スルニ臨ミ童蒙教草ノ一章ヲ抄写シ板主ニ請フテ茲ニ追加ス

「フランキリン」ノ遺文ニ云ク富ヲ得ル道ノ易ク平ナルハ市ニ行ク道ノ如シ唯二言ヲ以テ之ヲ尽セリ働ト儉約トナリ時ヲ費ス勿レ金ヲ費ス勿レ此二ツノ者ヲ巧ニ用ベシ働ト儉約トヲ棄レバ成ルベキコトナシ此二ツノ者ヲ守レバ成ラザルコトナシ少年ノ男子既ニ働キテ且儉約ナラバ此ノ外ニ富ヲ助成スモノハ綿密ト正直ノ二箇条ナリ勉強ハ恰モ幸福ヲ生ム母ノ如シ天ハ万物ヲ人ニ与ヘズシテ働キニ与フル者ナリ今日ト云フ其今日ノ内ニ働ク可シ明日ノ故障ハ測ルベカラズ汝モシ人ノ家来トナリテ其主人ヨリナマケ者トテ叱ラレナバコレニ赤面セザルヤサレバ今汝ハ人ノ家来ニアラズシテ自身ノ主人ナリ自カラ其懈ルヲ咎テ自カラコレニ赤面セザル可カラズ

明治六癸酉年十月

全篇を通じて、平明な文章の中に、遠大な志望と、高邁な意気とが溢れている。実にこの文章は、ひとり一商会の創立の趣意書たるに止まらず、明治初年のナショナリズムと、初期の資本主義の精神とを表現した重要な宣言である。

しかしこの重要な「丸屋商社之記」が何人の筆になるか明らかでないのは、すこぶる遺憾である。早矢仕四郎の追憶談によると、これは父有的自身の起草によるものであるという。ところが一方で「福沢諭吉全集」の編纂者富田正文氏などは、これを福沢が立案起稿したものとして、全集に収めている。（岩波版福沢諭吉全集第二十巻）これは有的自身この種の文章を草することが殆どなく、また商社之記の文体が諭吉の独自の特色を持っているという理由かららしい。これはまた福沢自身の筆になる「童蒙教草」の一節が追補されているということにもよるであろうか。また有的の甥の早矢仕虎吉は、有的は平素すこぶる多忙で執筆の暇などはなかったから、これは恐らく有的の考えを最もよく理解した沢井秀造の作であろうといっている。あるいは、はじめ全体の主旨を有的あるいは秀造が起案したものを、福沢が筆削潤色したような事情があったのではあるまいか。いずれにしても、真の筆者は今では不明という外はない。